

# アメリカが作るオーストリアの過去の記憶

——『サウンド・オブ・ミュージック』について——

(その1)

松 崎 博

## 1. アメリカの家族の物語

アカデミー賞を5部門で獲得した『サウンド・オブ・ミュージック』(*The Sound of Music*, 1965)は、ハリウッドが制作してきたミュージカル映画のなかでも特別な位置を占めている。本作は初公開後、映画館での再上映はもとより、テレビ放映が幾度となく繰り返され、ビデオテープを手始めに、レーザーディスク、DVD、そしてブルーレイなど、新たな家庭用の映像ソフトが開発される度に新装版が制作されてきた。それだけではなく、制作後の節目の年には、様々な特典を付けた特別版も作られてきた。つまり、それらを買いたい人々が数多く存在するということである。このような異例とも言える扱いをされているミュージカル映画は他に例がない。『サウンド・オブ・ミュージック』と同じく、ロバート・ワイズ(Robert Wise)が監督を務めた、アカデミー賞10部門受賞作の『ウエスト・サイド物語』(*West Side Story*, 1961)ですらも、これほどの厚遇を受けてはいない。

映画『サウンド・オブ・ミュージック』は、大きな副産物を作り出したことでも特筆される。物語の舞台となったオーストリアのザルツブルクでは、その初公開の翌年の1966年には早くも、アメリカン・エクスプレス社が、映画のゆかりの地をめぐるツアーを開始している。そして、同種ツアーの現在の最大手、パノラマ・ツアーズ社が提供している各種のコースには、年間およそ5万人の参加者があるという(Maslon 172)。このような数字に見られる、所謂「サウンド・オブ・ミュージック・ツアー」の隆盛は、公開から半世紀の

時を経ても、本作が根強い人気を有している証である。

ザルツブルクの観光産業に対して、『サウンド・オブ・ミュージック』は、この街が生んだ天才音楽家モーツァルトの関連施設や豪華な夏のフェスティバルなどと並んで、多大な貢献をしてきた。しかし、本作は初公開の際に、当の現地では客が入らず、わずか3日間で上映が打ち切られている。また映画版の『サウンド・オブ・ミュージック』は、ブロードウェイで1959年に初演された同名のミュージカルをもとにしているが、この舞台版がザルツブルクで初めて上演されたのは、21世紀に入ってからと遅く、2011年10月23日のことである。この街での公演が例外的に遅かったというわけではない。首都のウィーンにおける本作の舞台版の初上演も2005年であったのだ。つまり、オーストリアの人々は、この人気ミュージカルをなかなか受け入れようとはしなかったということである。

『サウンド・オブ・ミュージック』は、リチャード・ロジャーズ(Richard Rodgers)とオスカー・ハマースタイン二世(Oscar Hammerstein II)の最後の共作となったものである。彼らが創作した多くのヒットミュージカルのなかには、シャムと呼ばれていた19世紀のタイ王国を舞台にした『王様と私』(*King and I*, 1951)も含まれている。この作品は、舞台版、そしてそれをもとにした映画版共に、タイでは公演・上映が認められていない。つまり、『サウンド・オブ・ミュージック』と同じように、『王様と私』も物語の舞台になった現地の人々は、その内容を受け入れがたいものと感じてきたのだ。この両作品は実話を下敷きに

したという共通点があるが、それゆえに、作中に描かれた虚構と実像のギャップが、現地の人々によるこれらの作品の受容を一層困難にしてきたとも考えられる<sup>1)</sup>。

舞台と映画の2つの『サウンド・オブ・ミュージック』は、トラップ一家という実在の家族を扱っている。しかし、このミュージカルは、彼らの祖国であるオーストリアでの1920年代から30年代の一家の実体験を、1950年代終わりから60年代半ばにかけて、ブロードウェイとハリウッドというアメリカのエンターテインメント産業の中心で、語り直すことによって制作されたものなのである。そして、本作について考察する場合に忘れてはならないのは、トラップ一家が祖国を逃れ、アメリカ人になることを選択した家族であるということだ。一家のメンバーが、アメリカへの帰化申請をしたのは1944年。そして、祖国オーストリアを離れてから10年後の1948年、彼らはアメリカの市民権を得た。ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』が作られたのは、そのさらに10年後のこと。トラップ家が、オーストリアではなく、アメリカの家族となつてから、既に20年の年月が流れていた。

ブロードウェイそしてハリウッドが世に送り出してきた数多のミュージカル作品は、利潤を求める商業的なエンターテインメントである。それゆえ、多くの人々に受け入れられることが至上命令となっている。多くの人々を惹きつけるためには、制作当時のアメリカの価値観は無視できない。この小論では、『サウンド・オブ・ミュージック』の制作に関わった人々が、商業的な成功を目指して、オーストリア出身の「アメリカの家族の物語」をいかにして作り上げたのかを考えてみたい。また、長らくオーストリアで受け入れられなかった本作が、21世紀に入って相次いで舞台上演されたのか、その背景についても考察することになるだろう。

## 2. 『サウンド・オブ・ミュージック』誕生

『サウンド・オブ・ミュージカル』は、物語のヒロインのモデルである、マリア・アウグスタ・

フォン・トラップ (Maria Augusta von Trapp) が1949年に出版した回想録『トラップ・ファミリー合唱団物語』(The Story of the Trapp Family Singers) に着想を得たミュージカルである。ミュージカルの脚本や映画にも、そのようにクレジットされている。しかし、ミュージカルの成立には、同じ回想録を下敷きにして当時の西ドイツで制作された『菩提樹』(Die Trapp Familie, 1956)と、その続編である『続・菩提樹』(Die Trapp Familie in Amerika, 1958)の存在を無視することはできない。

マリアの回想録をもとにしたこれらの西ドイツ映画は成功を収め、アメリカでは『菩提樹』と『続・菩提樹』を1本にまとめた英語の吹き替え版が作られた。また、パラマウント映画はオードリー・ヘップバーンを主役とするリメイク版を計画し、ヴィンセント・J・ドナヒュー (Vincent J. Donehue) に監督を依頼した。2本の映画を視聴したドナヒューは、ハリウッド版のリメイクよりも、良いアイデアを思いつく。ブロードウェイの大スターであった旧知のメアリー・マーティン (Mary Martin) を主役とする舞台版の制作を思い立ったのである。さっそく、ドナヒューはマーティン自身と彼女の夫でプロデューサーをつとめていたリチャード・ハリデー (Richard Halliday) に話を持ち込む。そして、これらの映画を視聴した彼らもドナヒューのアイデアに同意し、舞台版の制作が決まった。マリアの回想録ではなく、それをもとにした西ドイツ映画が、『サウンド・オブ・ミュージック』へと繋がる作品の制作の直接のきっかけとなつたのである。

完成したミュージカルそのものからも、『菩提樹』の影響は分かる。例えば、物語に登場するトラップ家の子供たちの年齢である。『菩提樹』では、彼らの年齢が実際よりも引き下げられ、トラップ一家の合唱団は年若い子供たちが主体のグループのように描かれている。『サウンド・オブ・ミュージック』でも、それが踏襲されているのである。実在のトラップ一家がザルツブルクを離れた1938年には、劇中の長女のリーズルに相当するアガーテは、『サウンド・オブ・ミュージック』

のなかで歌われるような「もうすぐ17歳」の16歳ではなく25歳、長男のルーペルトは既に27歳になっていた<sup>2)</sup>。

トラップ一家の物語の舞台版は、当初ミュージカルではなく演劇として着想された。脚本の担当は、ハワード・リンゼイ (Howard Lindsay) とラッセル・クラウス (Russel Crouse) である。劇中の音楽は、トラップ家が実際に舞台上で歌っていたものを使用する予定であったが、それらに加え、マーティンは自身が作中で歌う新たな挿入曲の制作をロジャーズとハマースタインに依頼した。彼女は彼らのヒットミュージカルである『南太平洋』(South Pacific, 1949) のヒロイン、ネリー・フォブッシュ役を演じて大成功を取っていた。

トラップ家の物語を扱った西ドイツ映画の邦題が、フランツ・シューベルトの歌曲集『冬の旅』に含まれている「菩提樹」であることに示されているように、一家が舞台上で歌っていたのは、クラシックやバロックそして教会音楽などであった。彼らの実際の歌声やレパートリーは、CDなどで確認できるが、『サウンド・オブ・ミュージック』のなかの楽曲とは、かなり趣の異なる音楽である。マーティンから新曲の依頼を受けたロジャーズとハマースタインは、同一の作品の中で、自分たちの作品が古くからの名曲と並べられることを望まなかったこともあり、ある提案をする。計画中のマーティン主演の演劇をミュージカルへとジャンルを変更し、劇中の楽曲を両名が新たにすべて書き下ろすというものである。ただし、彼らのこの提案には条件があった。ロジャーズとハマースタインは当時、サンフランシスコのチャイナタウンを舞台とする『フラワー・ドラム・ソング』(Flower Drum Song, 1958) の制作中であり、新たなミュージカルの制作に取り掛かるためには1年の猶予が必要というものである。マーティンたちは「待つ」と答えた。

ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』の制作が本格始動したのは1959年の春である。『オクラホマ!』(Oklahoma! 1943) を嚆矢とする、ブロードウェイ・ミュージカルの黄金期を支えたロジャーズとハマースタインの共作では、

前者が作曲、後者が作詞と脚本を常に担当してきた。しかし、当初の演劇版の制作計画からの経緯もあって、リンゼイとクラウスがそのままミュージカルの脚本も担当することになった。そのため、本作はロジャーズとハマースタインの共作の中で、後者が作詞だけを書いた唯一の作品となった。8月にはリハーサルが開始され、ブロードウェイにおける初演は11月16日にラント＝フォンテン劇場で行われた。その後、このミュージカルは劇場を変えて1963年6月15日まで1443回の公演が続けられている。マーティンはマリアとして、1961年の10月までブロードウェイの舞台上に立っている。本作は1960年のトニー賞では9部門にノミネートされ、作品賞や主演女優賞などを含む6部門で受賞した。そして、アメリカ国内のツアーも、1961年から63年にかけて40以上の都市で行われた。

『サウンド・オブ・ミュージック』の制作には40万ドルの費用がかかったが、2320万ドルという記録破りの前売り実績を上げた (Maslon 71)。試演は概ね好評であった。しかし、観客動員に大きな影響を与えるニューヨークの有力な批評家の評価は芳しくはなかった。『ヘラルド・トリビューン』のウォルター・カー (Walter Kerr) は作品の持つ「甘ったるさ」、『ニューヨーク・タイムズ』のブルックス・アトキンソン (Brooks Atkinson) は脚本の「陳腐さ」をそれぞれ問題にした。このようなネガティブな評価に関わらず、観客たちはこのミュージカルを愛した。マーティンは自身の自伝に、「批評家に対して観客が勝利を取ったものがあるとしたら、それは『サウンド・オブ・ミュージック』である」と記している (Martin 239)。そして、1965年3月にジュリー・アンドルーズ (Julie Andrews) を主演とする映画版が公開され、『サウンド・オブ・ミュージック』の人気は決定的なものになる。

日本での舞台版の初演は1965年1月2日、映画版も同年の6月26日に初公開されている。この同じ年にはまた、メアリー・マーティンが、アメリカ政府の後援による、ミュージカル『ハロー、ドーリー!』(Hello, Dolly! 1964) のツアー

で9月に初来日し、東京宝塚劇場で25回の公演を行っている。この日本での公演の後、彼女の一座が赴いたのは戦時下のヴェトナムであった<sup>3)</sup>。

### 3. 妻の立ち位置——舞台と映画の違い

2013年12月、アメリカのNBCが『ザ・サウンド・オブ・ミュージック・ライブ』(*The Sound of Music Live*)という、舞台版にもとづくテレビ版を放映した。この番組は日本でもDVD化され、簡単に視聴ができる。映画版に馴染んできた人々は、この映像ソフトを視聴すると、驚く場面が次々に出てくるはずだ。例えば、映画版でマリアとトラップ家の子供たちが心を通わすことになる、雷鳴が轟くなか、彼女の寝室の場面で歌われる「私のお気に入り」(*My Favorite Things*)は、舞台版ではトラップ家に家庭教師として派遣されることになったマリアの不安を和らげるために、彼女と修道院長との間で歌われる。舞台版のマリアの寝室で歌われるのは、「ひとりぼっちの羊飼い」(*The Lonely Goatherd*)である。また、修道院を後にしてトラップ家に赴く道すがら、自己を鼓舞するようにマリアが歌う「私には自信がある」(*I Have Confidence*)は舞台版には含まれていない。この歌はトラップ男爵とマリアがお互いの気持ちを確かめ合う場面で歌われる「何かいいこと」(*Something Good*)と共に映画版に追加された新たな楽曲である。映画版の制作当時、ハマースタインは既に病気で死去していたため、追加されたこの2曲の歌詞はロジャーズの手になるものだ。「何かいいこと」は、舞台版の「ありふれたカップル」(*An Ordinary Couple*)の差し替え用の楽曲である。現在の舞台上演の際には、「私には自信がある」と「何かいいこと」が、歌われることがしばしばある。ここで述べた以外にも、舞台版と映画版では楽曲には差異があるが、両者の違いは音楽の面に留まらない。

映画版の脚本を担当したのは、映画版の『ウエスト・サイド物語』でも脚本を書いたアーネスト・レーマン (*Ernest Lehman*) である。『ウエスト・サイド物語』では、アーサー・ロレンツ (*Arthur Laurents*) による舞台版脚本の文言をレー

マンは、非常に尊重している。しかし、『サウンド・オブ・ミュージック』の映画版脚本は、リンゼイとクラウドのオリジナルへの依存度が、かなり低く、書き換えが顕著である。

主役のマリアとトラップ男爵の性格あるいは位置づけも、舞台版と映画版では印象がかなり異なる。それを端的に表しているのが、幕切れの場面である。舞台版ではメアリー・マーティン演ずるマリアがトラップ一家を率いて山を登って行くというフォーメーションでクライマックスを迎えるのだが、映画版では家族の先頭に立っているのはトラップ男爵なのである。

舞台版でマリアが一家の先頭に立つことは、オリジナルの脚本のト書きのなかに指示があり (*Hammerstein 149*)、単なる演出の上の問題ではない。『サウンド・オブ・ミュージック』という作品が、もともとメアリー・マーティンというひとりのプリマドンナのために制作されたという経緯から、女性の主役にスポットが当たるような幕切れになったという説明もできるだろう。しかし、この幕切れの一家のフォーメーションについては、考える場合に役作りのために実在のマリアに会ったマーティンが、「一家は単にあの山を登って逃れたのではない。彼女が彼らを押上げたのである」という言葉を残していることを忘れてはならない (*Martin 243*)。つまり、オリジナルの舞台版の幕切れで、トラップ男爵ではなく、マリアが一家の先頭に立っていたのは、実在のマリアの家族内での立ち位置の忠実な表現でもあったのである。

映画版ではトラップ男爵の一家の長としての性格が強調されている。物語の終盤で、亡命のために音楽祭の会場を逃れ、修道院の墓地に身を潜めている一家を、リーズルのボーイフレンドであったナチのロルフが発見した場面における、舞台版と映画版の違いからもそれが分かる。舞台版では彼女の懇願によって、彼は一家の発見を知らせる笛を吹くのをやめる。一方、映画版でロルフの行動を押しとどめる (しかも、かなり高圧的に) のはトラップ男爵なのだ。

当初は参加を辞退するはずであった音楽祭で、

一家が歌うことになったのは亡命の時間稼ぎのためであった。そしてまた、トラップ男爵を第三帝国の海軍の任務に就かせるべく、彼の身柄を確保しようと、屋敷にやってきたナチスの将校たちを前にして、機転を利かせ、一度は辞退することにした音楽祭へ参加するアイディアを思いつく人物が2つの版では違うのである。舞台版ではマリアであるが、映画版ではトラップ男爵なのだ。つまり、舞台版ではあまり感じる取ることのできない、家族を守ろうとする頼りになる家長としての男爵の姿が、映画版では強調されていると言える。そのような男爵の姿を、観客に決定的に印象付けるのが、彼が家族の先頭に立って家族を率いて山越えをしてゆく、前述の映画のクライマックスのシーンなのである。

舞台版と映画版の男爵像の違いが生まれた背景には、後者でトラップ男爵を演じたクリストファー・プラマー（Christopher Plummer）が、オリジナルの舞台版の男爵像に不満を抱き、レーマンに書き直しを求めたという経緯がある。監督のワイズも舞台版の男爵像に深みが足りないと感じていたこともあり、この書き直しに同意をしていた。プラマーにとって、舞台版の男爵は「恐ろしいほど堅物」で、その性格にはあまり「中身」がないように思われたのだ。脚本を書き直すことで、男爵をマリア・フォン・トラップと「同等」の存在にすることを彼は望んだのである（Hirsch 41）。

舞台版と映画版の間の男爵とマリアの関係の描き方の違いを端的に示す点がある。それは、マリアのトラップ男爵の呼び方の変化である。両者とも結婚前のマリアは男爵をキャプテン（艦長）と呼ぶ。結婚後、舞台版のマリアは男爵をキャプテンから、ゲオルク（Georg）と呼び方を変えるのだが、映画版のマリアは男爵を三人称の「彼」と呼び、ファーストネームで呼ぶことは1度もないのである<sup>4)</sup>。マリアの回想録には、結婚を目前にして、「彼をゲオルクと呼ぶことを覚えた」という記述がある。このことから分かるように、実在のマリアは結婚後、男爵をファーストネームで呼んでいた（Trapp 61）。男爵の呼称については、舞台版における描き方がトラップ夫妻の実像に近

いのである。

ではなぜ、映画版のマリアは男爵をファーストネームで呼ばないのか。それは、雇主と家庭教師という両者の関係が、結婚によって夫と妻に変更されても、その主従の関係に変わりがないことを示すためであろう。映画版では、二人の関係は結婚後も対等になることはないのである。映像面でも、マリアがトラップ男爵の前に出ない絵作りがされている。映画版の脚本を担当したアーネスト・レーマンは、男爵のファーストネームをマリアに呼ばせないことで、彼女の立ち位置を、映画版のクライマックスの山越えの場面と同じように、夫であるゲオルクの背後に置いたと言える。

#### 4. 誇り高き無職夫の葛藤？

実在のトラップ家の人々は、『サウンド・オブ・ミュージック』での彼らの家族の描き方が実態とは異なっていることに強い不満を抱いていたことはよく知られている。彼らが最も不満に感じていたのは、トラップ男爵の描き方である。例えば、長女のアガータは自身の回想録のなかで、男爵を「パパ」と呼び、「彼は冷たい表情で、ホイッスルを啜って子供たちに厳しく命令をするような海軍の将校ではありませんでした。実際には、あらゆる面で私たちの幸せに心配りをしてくれる献身的な父親だったのです」と書いている（von Trapp, Agathe 197-98）。実在のトラップ男爵は、たしかに優しい人であったようだ。残された家族の写真のなかの柔和な表情からも、彼のそのような人柄がしのばれる。

ゲオルク・フォン・トラップは、1947年5月30日に67年の生涯を終えている。それゆえ、彼は『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台も映画も見えてはいない。このミュージカルに描かれた父親、そして夫の姿に、トラップ家の人々は口々に異議を唱えたが、当のゲオルク自身が本作を観たら、どのような反応をしたらろうか。冷たい表情でホイッスルを吹き鳴らして、子供たちを呼びつけるような父親の姿に対しては、おそらく否定的な反応を示すだろう。しかし、映画版に描かれたような、家族の先頭に立ち、毅然として妻や子

供たち守ろうとする夫、そして父親の姿には、好意的な思いを抱く可能性はあるように思われるのだ。それは、実際のトラップ家のなかで、彼が担っていた役割について再考しなければならない側面があるからである。

『サウンド・オブ・ミュージック』の解説のなかで、全くと言ってよい程に、言及されないのだが、トラップ男爵はオーストリア海軍での活躍を記した『最後の敬礼まで』(*Bis zum Letzen Flaggenschuss*)と題された回想録を1935年にザルツブルクの書肆から出版している。この本は、長らく絶版であったが、ゲオルクとマリアの孫娘によって英訳され、2007年に出版されている。その孫娘のエリザベス・M・キャンベル(Elizabeth M. Campbell)によれば、マリアもその執筆作業を手助けしたらしい(von Trapp, Georg xix)。

この回想録がいつ書き始められ、いつ完成したのかは、はっきりしない。しかし、その執筆については、マリアの回想録のなかに言及がある。出版よりも8年ほど前の出来事として、この回想録の執筆が語られている。マリアのトラップ家での家庭教師としての任期が残りわずかになった1927年6月の半ば頃、男爵は彼女への結婚の申し込みをしたのだが、そのエピソードの枠組みのなかで言及されているのである。ある日、ゲオルクが回想録を執筆中の部屋から3人の子供たちが出てきて、マリアに大きな声で「お父様がおっしゃるには、あなたがお父様を好きかどうかかわからないだって」と叫んだらしいのである(Trapp 57)。これが、子供を使ったゲオルクからマリアへの結婚の申し込みであった。

ゲオルクは、その軍功によってマリア・テレジア勲章騎士十字章を授けられたオーストリア＝ハンガリー帝国海軍の英雄であった。しかし、第一次世界大戦で敗れ、海を持たぬ内陸の小国となったオーストリアでは、海軍は無用の存在となり、ゲオルクは働く場を失う。打ちひしがれた彼を支えたのは、最初の妻のアガーテであった。しかし、その彼女も7人の子供を残して、1922年に猩紅熱がもとで没してしまう。その後のゲオルク

の様子は、マリアの言葉を借りれば、「命の半分は海軍と共に死に、残りの半分のほとんどが、妻と共に葬られたように思われた」という(Trapp 26)。

海軍での仕事を失った後、ゲオルクは様々な仕事に手を染めたいらしい。しかし、どれも長くは続かなかった。1926年の10月にマリアがトラップ家に家庭教師としてやってきたとき、彼には定職がなく、無職状態だったと言えるだろう。トラップ家の生活を支えていたのは、ゲオルクの収入ではなく、魚雷の発明者ロバート・ホワイトヘッド(Robert Whitehead)の孫娘であるアガーテの遺産であった。しかし、世界恐慌のなか、友人が経営するオーストリアの銀行を助けるべく、ゲオルクはロンドンの銀行に託していた一家の預金を移してしまう。そして、その銀行が1932年9月に倒産してしまうのだ。トラップ家は彼らの生活の経済的な基盤を失ったのである。

ゲオルクの友人の銀行の倒産後、マリアは屋敷で働いていた多数の使用人(1926年には20人ほどいた)の大半に暇を出し、収入を得るために下宿人を置くことを始める。つまり、ゲオルクが1935年に回想録を出版した時、一家の先頭に立って、トラップ家の生活を切り盛りしていたのは、祖国の銀行への多額の預金の移動という、義を尽くしたとも言えなくはないが、世の情勢を見誤った行為によって、家族を困窮に陥れた当のゲオルクではなく、マリアだったのである。このような当時の一家の状況を考えた場合、回想録の出版は、マリアの家族を支えようとする精神的な振る舞いの前に影が薄くなりがちになっていたゲオルクの、誇り高きオーストリア＝ハンガリー帝国海軍の英雄たる己の存在を再確認し、それを周囲に認めさせるための一種のパフォーマンスとも解釈できるのではない。

1938年のナチスドイツによるオーストリア併合の後、ゲオルクは第三帝国の海軍の真新しい巨大な潜水艦の艦長への就任を丁寧な文面の手紙で打診される。舞台版の『サウンド・オブ・ミュージック』では、この申し入れを受けたときのゲオルクの反応は描かれず、一方、映画版では、ゲオルクがそっけなく「彼らが海軍の将校への任命状

を送ってきた」（曾根田 176）と、送られてきた電報を片手にマリアに告げて、その要請をそっけなく拒絶するにすぎない<sup>5)</sup>。マリアの回想によれば、第三帝国の海軍省からの届いた手紙を一読し、ゲオルクは「非常に興奮した様子」で、それを彼女に手渡したようだ。そして、ナチスのために働くという嫌悪感と仕事の受諾の間で揺れ動くゲオルクの様子が、この回想録の中に記されている。

これは、一生に一度のチャンスだ。……当然、このような素晴らしい仕事は引き受けるべきだ。……でも、ナチスのために潜水艦を操作はできない。もちろん、だめだ、絶対にだめだ。……しかし、引き受けないのはまずいのではないか。とにかく、彼 [ヒトラー] が、今は国の長なのだ。私は海軍の人間だ。私が熟知していて、うまくやれるのはこの仕事だけだ。おそらく、これが神の意志なのだ！……皆は私が子供たちの将来を考えるように望んでいる。それが危険にさらされているのだ。どのように暮らすかも考えねば……。 (Trapp 122–23)

ゲオルクは逡巡しつつも、結局、第三帝国からの申し入れを拒絶する。この海軍省からの手紙を受け取ったとき、トラップ家は家族の合唱団として既に活動を始めていた。1936年の夏、高名なフェスティヴァルに出演するためにザルツブルクに来ていたロッテ・レーマン (Lotte Lehmann) は、一家が前年の夏に屋敷を貸していたことを聞きつけ、借用の依頼をしようと、トラップ家を訪問する。その際、この往年の名ソプラノは彼らの歌声を耳にすることになる。そして、感銘を受けたレーマンは、ザルツブルクで開かれるコンクールに出場することを彼らに強く勧めるのである。そして、トラップ家の合唱団は、そのコンクールで見事に優勝する。マリアの回想録では、庭で練習をしていた彼らの歌を、たまたまレーマンが耳にしたことになっているが、アガーテによれば、マリアが彼女に彼らの歌を聴いてくれるように頼んだという (Trapp 104, von Trapp, Agathe 121)。マリアの積極的な性格を思えば、アガーテの記憶の方

が正しいように思われる。

コンクールでの優勝後、一家の合唱団はラジオ出演や、それを聴いたオーストリア首相クルト・フォン・シュシュニック (Kurt von Schuschnigg) からのウィーンでの演奏依頼などによって有名になり、1937年には国外へ演奏旅行に出るまでになっていた。このようなトラップ家の合唱団の音楽水準の高さは、フランツ・ヴァスナー神父 (Father Franz Wasner) による訓練の賜物だった。トラップ家の音楽活動を、その合唱団の結成から1956年の活動休止まで支え続けたのは、ミュージカルには登場しない、このヴァスナー神父なのである<sup>6)</sup>。

ヴァスナー神父は復活祭ミサを一家の私設のチャペルで執り行うために司教からトラップ家に派遣され、そのまま屋敷の下宿人となった人物だ。神父は一家の歌声を耳にして、直ちにその優れた素質を見抜き、訓練を始めたのである。マリアはヴァスナー神父の指導を「魔法」と形容し、彼が指導を始めたころの思い出を大切にしていた。彼女の回想録には「恋のあらゆる香りに満ちた、初恋の時だった」という記述が見られるほどである (Trapp 104)。マリアの回想録に記された、この「恋」とは、音楽への恋のことなのだが、恋の対象はそれだけだったのだろうか。

ヴァスナー神父がトラップ家にやってきたのは1935年のことである。この年、マリアとヴァスナー神父は合作で「二人」(“Zwei Menschen”) という曲を作ったことが分かっている。マリアが歌詞を書き、神父が曲をつけた。彼女が書いた歌詞は「月明かりの下を二人が歩いている／リンゴの花が咲き乱れ／花びらが雪のように、二人の頭に降りかかる／鐘が遠くで鳴っている」というラブソングを思わせるものである (Santopietro 13–14)。この歌が作られた同じ年に、マリアがその執筆の手助けをしたゲオルクの彼の海軍の英雄時代を扱った回想録も出版されている。単なる偶然なのかもしれないが、マリアとゲオルクが二回りも年齢差がある一方で、彼女とヴァスナー神父が同年生まれということを知ってしまうと、下世話な邪推を誘う符合ではある<sup>7)</sup>。

この本の出版が1935年のいつ頃なのかは、筆者にはまだ分からない。仮に、この回想録の出版が、ヴァスナー神父の存在がトラップ家の生活の重要な一部になった春以降のものであったとしたらどうか。ゲオルクの回想録の出版のタイミングが明らかになれば、マリアとヴァスナー神父との関係、そして両者の姿を間近で見ていたゲオルクの思いが、浮かび上がってくるのかもしれない。

ゲオルクはロッテ・レーマンが、彼の家族はコンクールに参加するべきだと主張したときに、反対をしている。結局、一回だけということで、高名なソプラノの説得に彼は折れたのだが、貴族出身の彼にとって、人前で歌うなどということは、威厳を損なう行為であり、言語道断であったのだ。それゆえ、ゲオルクには音楽の素養があったにも関わらず、演奏旅行などに同行し、マリアに紹介されて舞台上で挨拶をすることはあっても、一家の音楽活動に加わることはなかった。彼は演奏旅行の管理やスクラップブック作りなどを行い、一家の音楽活動をサポートする裏方となったのである。(Maslon 39)。

トラップ家の合唱団の活動が国外にまで広がりをみせ、舞台上で脚光を浴びながら、一家の生活の屋台骨を支えるマリアと、舞台裏でそれを支えるゲオルク。世間一般の夫と妻の役割が逆転したような状態であったと言える。このような関係をゲオルク自身がどのように思っていたのかは想像の域を出ない。しかし、確かなことは、夫婦逆転のような生活を送っていた時に、第三帝国の海軍省から、ゲオルクのもとに潜水艦の艦長への就任の打診が届いたときに、彼が先方の申し出を即座に拒絶したのではなく、逡巡し、受諾すらも考えたということだ。

なぜ、ゲオルクはナチスを嫌悪しながら、その申し出を受け入れようとしたのか。かつての海軍の英雄として、最新の潜水艦を艦長として動かしてみたかっただけなのかもしれない。しかし、それだけではなく、家族の生活を支えていた音楽活動の裏方だった彼が、第三帝国の海軍省からの打診を、一家の家長としての矜持を取り戻すチャンスと見なしたとしても不思議はないだろ

う。マリアの回想録に描かれた、ゲオルクのこの打診を受けたときの興奮や、それを拒絶するまでの心の揺れは、彼のそのような思いも示しているように思われる。

妻が表舞台に立ち、夫が裏でそれを支えるというトラップ家の夫婦関係は、『サウンド・オブ・ミュージック』のオリジナルのマリアを務めたメアリー・マーティンとリチャード・ハリディのカップルも同様であった。彼らの生活を支えていたのは、間違いなくブロードウェイのスターだったメアリーの稼ぎである。マーティンの伝記などによると、『サウンド・オブ・ミュージック』がブロードウェイの舞台上で上演されていた頃、リチャードは、アルコール中毒の状態で、人事不省に陥ることもあり、酒を抜くために入院をしたりしていたという。また、リチャードはメアリーのあらゆる面に事細かく干渉する束縛傾向の強い夫でもあったようだ (Kaufman 207)。

リチャードの酒の過剰摂取や妻を支配しようとする態度の背後にあったのは、プリマドンナの夫という立場からくるプレッシャーだったかもしれない。さらに、彼らの夫婦関係には二人のセクシュアリティの問題も影を落としていたように思われる。メアリーの最大の当たり役であり、彼女のお気に入りでもあったのは、女性の役柄ではなく、ピーター・パン (Peter Pan) という少年の役であった。メアリーはこの役をブロードウェイの舞台のあと、3度にわたってテレビ放映用にスタジオで演じている。異例のことである。それゆえ、アメリカの人々にとって、メアリー・マーティンの名前はピーター・パンと分かちがたく結びついている。『ピーター・パン』の3度目の収録と放映が行われたのは、メアリーがマリアとしてブロードウェイの舞台上に立っていた『サウンド・オブ・ミュージック』の公演の期間中のことであった<sup>8)</sup>。(つづく)

#### 註

- 1) この2作は、外部からやってきた女性教師が、血縁のない多数の子供もたちを教育するという物語の面の共通点もある。

- 2) 実在のトラップ家の第一子は男子で、ミュージカルでの設定のように、女子ではなかった。このようにミュージカルと実在のトラップ家では、兄妹の順番、名前、年齢が変更されている。マリアとトラップ男爵が実際に結婚したのは、彼女がトラップ家の家庭教師になってからほぼ1年後の1927年11月26日である。マリアは22歳、男爵は47歳だった。ミュージカルの物語の時代として設定された1938年には、彼らの結婚生活は既に10年を超えていた。ミュージカルには登場しないが、1938年の段階で、2人の間に誕生した2名の女兒も加え、トラップ家の子供の数は7名ではなく、9名に増えていた。
- 3) マーティンのツアーについては、彼女と関係の深いNBCが*Mary Martin: Hello, Dolly! Around the World*と題された50分ほどのテレビ番組を制作し、1966年2月7日に放映している。この番組は、インターネット上に非正規のものではあるが公開されているようだ。マーティンは東京で、救世軍の孤児院を慰問しているのだが、その時、子供たちがベギー・葉山の作った日本語の歌詞による「ドレミの歌」を彼女に披露している。
- 4) トラップ男爵のファーストネームのGeorgは、ミュージカル(映画版、テレビ版)では「ゲオルグ」と発音されているが、慣例に従いドイツ語流の「ゲオルク」と表記した。本稿に登場するドイツ語圏の人々の名前の表記についても同様である。なお、「キャプテン」の訳だが、わが国では慣例的に「大佐」と訳されているが、ゲオルクの実際の階級が少佐であったことを考慮し、この小論では「艦長」とした。
- 5) この映画のスク립ト版(正確にはテープ起こし。しがたって、掲載されているト書き風のものはレーマンが書いたものではない)には、日本語訳も掲載されているのだが、本稿に使用したのは拙訳である。
- 6) マリアが子供たちに音楽を教えたという物語の展開にするために、ミュージカル版ではその存在が消されたのだろう。『菩提樹』『続・菩提樹』ではヴァスナー神父も登場する。
- 7) ドイツで発行されている、有名な週刊の全国紙『ディ・ツァイト』(Die Zeit)のオンライン版(2012年7月12日付)が、「トラップ一家——母と彼女の神父」(“Famillie Trapp: Die Mutter und ihr Gottesmann”)と題し、トラップ家の最後のタブーとして、両名に関する記事を掲載したことがある。
- 8) このマーティン主演の『ピーター・パン』は、1960年12月8日に放映された。現在、彼女がテレビ用に3回(55年、56年、60年)演じたピーター・

パンのすべてを、映像ソフトで視聴できる。『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台に立っていた当時の彼女の演技スタイルを確認する上で、貴重なドキュメントである。

#### 参考文献

- Anderson, William, *The World of the Trapp Family: The Life Story of the Legendary Family who Inspired The Sound of Music*, Stowe, The Trapp Family Lodge, 1998.
- Bikel, Theodore, *Theo: The Autobiography of Theodore Bikel*, New York, Harpercollins, 1994.
- Brinkley, Alan, *The Publisher: Henry Luce and His American Century*, 2010, New York, The Vintage Books, 2011.
- Chaplin, Saul, *The Golden Age of Movie Musicals and Me*, Norman, U of Oklahoma P, 1994.
- Clifford, Stephanie, “Von Trapps Reunited, Without the Singing,” *The New York Times*, Dec. 24, 2008.
- Duchen, Jessica, “Salzburg: A Festival Faces up to its Past,” *The Independent*, June. 2, 2006.
- Davis, Ronald L., *Mary Martin, Broadway Legend*, Norman, U of Oklahoma P, 2008.
- Dietz, Dan, *The Complete Book of 1950s Broadway Musicals*, Plymouth, Rowman & Littlefield, 2014.
- Dyer, Richard, *Only Entertainment*, 2<sup>nd</sup> ed., London, Routledge, 2002.
- Eliot, Thomas H. & Eliot, Lois J., *The Salzburg Seminar: The First Forty Years*, Ipswich, The Ipswich P, 1987.
- Giroud, Vincent, *Nicolas Nabokov: A Life in Freedom and Music*, New York, Oxford UP, 2015.
- Gallup, Stephen, *A History of the Salzburg Festival*, 1987, Topsfield, Salem House Publishers, 1988.
- Hammerstein II, Oscar, Howard Lindsay and Russel Crouse, *The Sound of Music: The Complete Book and Lyrics of the Broadway Musical*, New York, Applause, 2010.
- Hirsch, Julia Antopol, *The Sound of Music: The Making of America's Favorite Movie*, Chicago, Contemporary Books, 1993.
- Hischak, Thomas, *The Oxford Companion to the American Musical: Theatre, Film, and Television*, New York, Oxford UP, 2008.
- Jaklitsch, Hans, *Die Salzburger Festspiele Band III: Verzeichnis der Werke und der Künstler 1920–1990*, Salzburg, Residenz Verlag, 1991.
- Jones, John Bush, *Our Musicals, Ourselves: A Social History of the American Musical Theatre*, Lebanon, Brandeis UP, 2003.

- “Life Visits the Trapp Family in Vermont: Titled Austrians Found a New Home in America on Music and Hard Work,” *Life*, Nov. 8, 1943.
- Kandell, Jonathan, “Kurt Waldheim Dies at 88; Ex-UN Chief Hid Nazi Past,” *The New York Times*, June 14, 2007.
- Kaufman, David, *Some Enchanted Evenings: The Glittering Life and Times of Mary Martin*, New York, St. Martin’s P, 2016.
- Klein, Christina, *Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination, 1945–1961*, Berkeley, U of California P, 2003.
- Knapp, Raymond, *The American Musical and the Formation of National Identity*, Princeton, Princeton UP, 2005.
- Kozol, Wendy, *Life’s America: Family and Nation in Postwar Photojournalism*, Philadelphia, Temple UP, 1994.
- Lovensheimer, Jim, *South Pacific: Paradise Rewritten*, New York, Oxford UP, 2010.
- Martin, Mary, *My Heart Belongs*, New York, Quill, 1984.
- Mason, Laurence, *The Sound of Music Companion*, New York, A Fireside Book, 2007.
- Mast, Gerald, *Can’t Help Singing: The American Musical on Stage and Screen*, Woodstock, The Overlook P, 1987.
- McHugh, Dominic, *Loverly: The Life and Times of My Fair Lady*, New York, Oxford UP, 2012.
- Mordden, Ethan, *Rodgers & Hammerstein*, New York, Abradale P, 1992.
- . *Coming up Roses: The Broadway Musical in the 1950s*, New York, Oxford UP, 1998.
- Müller, Stefan, “Familie Trapp: Die Mutter und ihr Gottesmann,” *Die Zeit Online*, Juli. 12, 2012.
- Nolan, Frederick, *The Sound of their Music: The Story of Rodgers & Hammerstein*, New York, Applause, 2002.
- Parmar, Inderjeet, *Foundations of the American Century: The Ford, Carnegie, & Rockefeller Foundations in the Rise of American Power*, New York, Columbia UP, 2012.
- Pells, Richard, *Not Like Us: How Europeans have Loved, Hated, and Transformed American Culture since World War II*, New York, 1997.
- Plummer, Christopher, *In Spite of Myself: A Memoir*, 2008, New York, Vintage Books, 2012.
- Rockwell, John, “Jean-Pierre Ponnelle, 56, is Dead, was Opera Director and Designer,” *The New York Times*, Aug. 12, 1988.
- Rodgers, Richard, *Musical Stages: An Autobiography*, 1975, New York, Da Capo P, 1995.
- Santopietro, Tom, *The Sound of Music Story: How a Beguiling Young Novice, a Handsome Austrian Captain, and Singing Von Trapp Children Inspired the Most Beloved Film of All Time*, London, Bantam P, 2015.
- Steinberg, Michael P., *Austria as Theater and Ideology: The Making of Salzburg Festival with a New Preface*, Ithaca, Cornell UP, 2000.
- Stirling, Richard, *Julie Andrews: An Intimate Biography*, New York, St. Martin’s Griffin, 2007.
- Tommasini, Anthony, “The Nazis and the Salzburg Festival: A Disputed Film History,” *The New York Times*, Aug. 15, 2006.
- Trapp, Maria Augusta, *The Story of the Trapp Family Singers*, 1949, New York, Harper, 2002.
- Von Trapp, Agathe, *Memories Before and After the Sound of Music*, 2004, New York, Harper, 2010.
- Von Trapp, Georg, Campbell, Elizabeth M. (trans.), *To the Last Salute: Memories of an Austrian U-Boat Commander*, Lincoln, U of Nebraska P, 2007.
- Wilk, Max, *Overture and Finale: Rodgers & Hammerstein and the Creation of Two Greatest Hits*, New York, Back Stage Books, 1999.
- Wolf, Stacy, *A Problem Like Maria: Gender and Sexuality in the America Musical*, Ann Arbor, U of Michigan P, 2002.
- アンダーソン, ウィリアム・T, 谷口由美子 (構成・訳・文) 『サウンド・オブ・ミュージックの世界——トラップ一家の歩んだ道』求龍堂グラフィックス, 1995年。
- 青木雪男 「物語の『舞台』なのに不人気: ウィーンで初上演『サウンド・オブ・ミュージック』」『朝日新聞』2005年2月18日(夕刊)。
- 梶原克彦 『オーストリア国民意識の国制構造』晃洋書房, 2013年。
- ギャラップ, スティーヴン, 城戸朋子・小木曾俊夫 (訳) 『音楽祭の社会史 (ザルツブルク・フェスティヴァル)』法政大学出版局, 1993年。
- 瀬川裕司 『「サウンド・オブ・ミュージック」の秘密』平凡社新書, 2014年。
- 曾根田憲三 (監修) 『サウンド・オブ・ミュージック——名作映画完全セリフ集76』スクリーンプレイ, 1996年。
- 玉川透 「映画『サウンド・オブ・ミュージック』故郷45年後の光」『朝日新聞』2010年7月22日(朝刊)。
- 野口祐子 (編) 『「サウンド・オブ・ミュージック」で学ぶ欧米文化』世界思想社, 2010年。
- フォン・トラップ, アガテ, 谷口由美子 (訳) 『わたしのサウンド・オブ・ミュージック——アガテ・

## アメリカが作るオーストリアの過去の記憶（松崎）

フォン・トラップの回想』東洋書林，2004年。  
フォン・トラップ，マリア，谷口由美子（訳）『サウンド・オブ・ミュージック』文溪堂，1997年。  
———.『サウンド・オブ・ミュージック——アメリカ編』文溪堂，1998年。  
ハーズスタイン，ロバート・E，佐藤信行・大塚寿一（訳）『ワルトハイム——消えたファイル』共同通信社，1989年。  
広瀬佳一・今井顕（編）『ウィーン・オーストリアを知るための57章 第2版』明石書店，2011年。  
増谷秀樹・古田善文『図説 オーストリアの歴史』河出書房新社，2011年。  
望月幸男『ナチス追及』講談社現代新書，1990年。  
本橋哲也『深読みミュージカル——歌う家族，愛する身体』青土社，2011年。  
山根銀二『音楽の旅——欧州・ソヴェト・中国』岩波書店，1956年。  
レーマン，ロッセ，野水瑞穂（訳）『歌の道のなかばに』みすず書房，1984年。  
ラカー，ウォルター，西村稔（訳）『ドイツの青年運動——ワンダーフォーゲルからナチズムへ』人文書院，1985年。

### 参考 DVD, Blu-Ray

*Mary Martin as Peter Pam: Collector's Edition: 1956 & 1955 Telecasts*, Video Artists International, 2015.  
*Peter Pan Starring Mary Martin*. リリース年，発売元共に不明。米 Amazon で入手可。1960年版の『ピーター・パン』。  
*Rodgers & Hammerstein's Cinderella Starring Julie Andrews*, Image Entertainment, 2004.  
*Tony Palmer's Film about The Salzburg Festival: A Brief*

*History*, Isolde Films, 2008.  
ゼイダン，クレイグ『サウンド・オブ・ミュージック・ライブ!』NBCユニバーサル・エンターテイメント，2015年。  
ノイエフェルト，マックス『野ばら』アイ・ヴィー・シー，1957年。  
リーベンアイナー，ヴォルフガング『菩提樹』アイ・ヴィー・シー，1956年。  
———.『続・菩提樹』アイ・ヴィー・シー，1958年。  
ワイズ，ロバート『サウンド・オブ・ミュージック——制作50周年記念版ブルーレイ・コレクターBOX』20世紀フォックス ホーム エンターテイメント，2015年。

### 参考 CD

*The Original Trapp Family Singers*, RCA Victor, 1998. トラップ一家がヨーロッパからアメリカに到着して間もない頃に，録音した楽曲が多数含まれている。  
*The Sound of Music: Original Broadway Cast Recording 50<sup>th</sup> Anniversary Edition*, Sony Music Entertainment, 2009.  
*The Sound of Music: The New Broadway Cast Recording*, RCA Victor, 1998.  
*The Sound of Music: Volksoper Wien*, MG-Sound, 2005.  
*The Sound of Music: Live aus dem Salzburger Landestheater*, MG-Sound, 2012.  
*Wiener Opernfest 1955 Highlights*, ORFEO International, 2005.

(上記の参考資料一覧には，この小論の「その2」に関するものも含まれている)